

シュメール語の能格性について

峯 正 志

0 はじめに

シュメール語は、能格言語だと言われている¹⁾。しかし、どのような能格言語であるのかという点、つまりどのような点に能格性が現れ、どのような点に現れないのか、という点については、これまであまり検討されてこなかった。それは、これまで能格性に関する総合的な研究が現れていなかったことが主な理由に挙げられるであろう²⁾。しかし、能格性に関する最新の知見を集めた Dixon (1994) が最近出版されたことで、そのような検討を行う時期がようやく到来したと言える。

そこで本稿では、これまでの先行研究を概観しながらシュメール語の能格性を総合的に考察し、その上で、これからの課題を探ってみたい。また、特に統語論レベルの能格性については、これまで全く検討されていなかったので、本稿でその一部について考察する。

1 従来の研究

シュメール語の能格性について初めて言及したのは Diakonoff (1965) であった。その後、Foxvog (1975)、Michalowski (1980) といった、能格性を直接扱った論文も出た。その後、Thomsen (1984) でもこれらの考え方が踏襲されている³⁾。

しかしながら、彼らの記述は実証的というより、むしろ思弁的なものと言わざるをえない。というのは、実際の用例に見られる複雑な様相に比べ、彼らの記述はあまりに図式的で単純だからである。

まず、彼らの記述の問題点を概観してみよう。次の章では、Thomsen の議論に従って概観する。

2 Thomsen での議論

今のところ、シュメール語における能格性の研究は、格標示および動詞の一致についてのみ見られる⁴⁾。

まず、格標示については能格的であるとする。すなわち、他動詞の主語に能格語尾 *-e* が現れ、他動詞目的語、自動詞主語は絶対格語尾 *-ø* が現れるとする。

そして、動詞の一致については、アスペクトにより指示する名詞句がことなるスプリット現象を見せるとする。それによれば、完了アスペクトでは能格的に、未完了アスペクトでは対格的に働くというのである。

具体的に見てみよう。シュメール語では定動詞の中に主語・目的語を表す代名詞的接辞が現れることがある⁵⁾。その際、

1) 完了アスペクトの場合

他動詞主語は動詞直前の位置に、他動詞目的語・自動詞主語は動詞直後の位置に現れる。

2) 未完了アスペクトの場合

他動詞目的語は動詞直前の位置に、他動詞主語・自動詞主語は動詞直後の位置に現れる。

としている⁶⁾。

ここでなにより問題なのは、実際の用例に当たった場合、これほど単純化して述べることは出来ないくらい複雑な様相を見せているにも関わらず、それらを単に書式の問題とか、書き誤りとしてやり過ぎしていることである。

そこで、次の章以下で、能格性がどのように現れるのかを確認した上で、シュメール語の能格性を検討するためには、どのような点を検討しなければならないのかを考えて行こう。

3 能格性の現れ方

能格性は文法のあらゆる領域に現れうるが、決して無秩序に現れるのではなく、現れやすい領域、現れにくい領域があり、しかも階層をなしていることが明らかになってきた。以下に、松本(1986)の記述に従い、概略を述べる。

能格性の最も現れやすい領域は、語形成や名詞化の領域である。例えば英語の名詞+動詞の複合語はS+V または O+V の組み合わせで出来、*A+V の組み合わせは自由には起こらない：

bird-chirping(S+V); bird-watching(O+V)

日本語でも「虫喰い」の様な少数の例外を除いて、*A+V の組み合わせは起きない。

また、英語の -ee は、自動詞の S、他動詞の O が表す者を指す名詞を派生する：

escapee(S); standee(S); employee(O); addressee(O)

これは能格性に関しては、「おそらく最も確実な普遍特性」(松本(1986))で、この様な例を挙げても、「与えられた言語が能格型言語であるという証明には成らない」(柴谷(1986))という。

次に現れやすいのは形態論で、これは主として「格標示」と「動詞の一致」である。ところで世界の言語を見渡してみると、格標示において能格型でありながら動詞の一致は対

格型という言葉は見られるが、その逆、つまり、動詞の一致は能格型なのに格標示は対格型という言葉は見られない。図示すると次のようになる。

格 標 示	動 詞 の 一 致	例 証
能 格 型	能 格 型	○
能 格 型	対 格 型	○
対 格 型	能 格 型	×
対 格 型	対 格 型	○

これは能格性が動詞の一致より格標示において現れやすいということを示している。

統語論は能格性の現れにくい領域であるとされている。統語現象としての能格性とは何か、という問題は難しい問題だが、原理的には、「様々な統語的プロセス（同一名詞句削除、再帰化、関係節化等々）を制御する中枢的な役割—いわゆる文法的主語ないし syntactic pivot —の振り当て（自動詞構文では通常 S）に関して S=A 方式がとられるか、それとも S=O 方式かという形で理解」（松本（1986）p.171）される。例えば、「男が女を殴った、そして逃げた」という形の等位構文で、二番目の自動詞文で省略された「主語」S が最初の他動詞文の A（=男）ではなくて、O（=女）と同定される（S=O）場合、また「男が女を自分の家で殴った」という形の文で、「自分」が「男」（=A）でなく「女」（=O）と解釈される場合がそうである。Dixon（1972）によって統語法の中にこの方式を一貫して持つ言語が存在することが明らかにされた。

ところで近年の研究により、形態的には能格的言語でありながら統語的には対格的に働いている言語が多いことが分かってきた。一方、形態的に対格的でありながら統語的に能格的な言語は存在しないことも明らかになった。図示すれば次のようになる。

形 態 法	統 語 法	例 証
能 格 型	能 格 型	ジルバル語・マヤ諸語
能 格 型	対 格 型	バスク語、その他大部分の「能格」言語
対 格 型	能 格 型	×
対 格 型	対 格 型	殆どすべての「対格」言語

従って、形態論に比べ統語論は能格性の現れにくい領域であると言えよう。

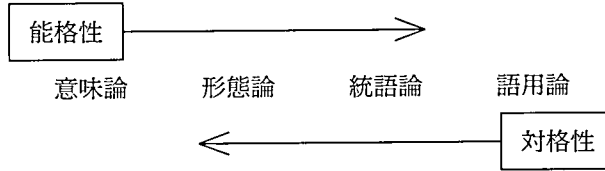
文を越えた談話のレベルにおいても能格性は現れうるのかという問題は非常に難しい。果たして、「談話構造の要となる『トピック』の選択において、一般に他動詞文の A よりも O が優先されるような語用論的観点が可能」（松本（1986）p.179）なのだろうか。

この問題は角田（1986）で扱われている。その結論は、調査したすべての言語（カルカトング語、ジャロ語、ワログ語、ジルバル語（以上、能格型言語）、英語、日本語）において「凡て、動作者の方が対象よりもトピック性が高い（prominent/important という意味で）」（角田（1986）p.165）ということであった。「トピック」の定義やデータの解釈は更に検討されるべきであろうが、仮にこの結論が正しいとすれば、能格性は談話の

レベルにおいて最も現れにくいということになる。

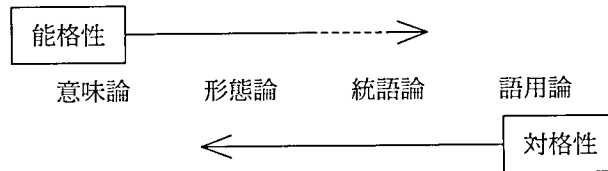
松本 (1986 p.179) は以上の事実を次のようにまとめている。

「これまでの議論の締めくくりとして、言語構造の諸領域の中で能格性と対格性が顕現する序列を示せば、下図のようになるであろう。



要約すれば、能格性は意味レベルにおける述語の項の意味機能に基盤を持ち、語形成および形態レベルでの格標示として顕現し、更に統語レベルにまで及ぶこともあるけれども、談話レベルにまで達することは殆どない。一方、対格性は談話レベルの情報構造（主・述関係）に基盤を持ち、まず統語レベルにおける主語・目的語という文法関係として顕現し、更に形態レベルの格標示にまで及ぶことがあるけれども、意味レベルにまで達することはけっしてない。いわゆる『能格言語』と『対格言語』の違いは、諸言語における上の二つの矢印の接点の違いに帰せられるであろう。」

厳密に言えば、能格性が統語レベルに達する言語は非常に少なく、一方、対格性が形態レベルにまで達する言語は割と多く存在することから、次のように図示するのがより良いのではないだろうか。



従って、能格性が統語論まで及ぶ言語が非常に少ないため、「能格」言語か「対格」言語かという問題に関しては、形態論の検討が決定的に重要なわけである。

4 シュメール語における能格性の現れ方

上で述べたように、語彙のレベルの能格性はあらゆる言語に普遍的に見られる現象であるから、本稿では検討しない。以下では、(1) 格表示のレベル、(2) 動詞接辞のレベル、(3) 統語的レベルの3点について検討してみる。

4. 1 格標示のレベル

格標示については、シュメール語の表記法の問題、および動詞接頭辞の問題が関わり、確実なことが言えるような段階ではない。自動詞の主語がどのような格標示を受けているかがはっきり分かればいいのだが、

1) 動作主格といわれる接尾辞 -e が表記されたり表記されなかったりする
ために、能格標示か絶対格標示かが判然としない。

また、動詞接頭辞の機能に未だ定説がないため、例えば、他動詞の目的語が省略されて
いるような場合、それが果たして依然として他動詞として用いられているのか、それとも
自動詞として用いられているのか、決めにくいという問題もある。

このような訳で、現段階では能格的な格標示が行われているようだとしか言えない。従っ
て、本稿ではこの問題について、これ以上の議論は行わない。ただ重要なことは、これら
を単に表記上の問題として、あるべきものがないのは単に表記を怠っただけだと、安易に
考えるようにしないことである。これまでの研究では、そのように単純に考えてきたため、
これ以上の検討を行う努力を怠っている。

これからの課題としては、格標示に関わっていると考えられている Silverstein の階
層⁷⁾や Tsunoda (1985)⁸⁾に見られる動詞句の意味による階層等を十分に考慮した考察を
行って、スプリットが見られるかどうかを検討することであろう。さらに、これまでの研
究では自動詞主語の格標示については、シュメール語は能格的な言語であるという先入観
からあまり十分に検討しているようには思われないので、Split-intransitivity⁹⁾が見られ
るか、それが格標示に現れているかといった問題も検討していく必要がある。

4. 2 動詞接辞のレベル

上で述べたように、Michalowski (1980) は、シュメール語の cross-reference 要素
-n/-b- が、完了アスペクトにおいて能格的、未完了アスペクトにおいて対格的に働くこと
を主張した。

ところが、これに対して Yoshikawa (1977) はそのような単純な仕組みではないこと
を明らかにした。

彼は、cross-reference 要素 -n/-b- が多くの動詞でそのように振る舞うことは確かだが、
そのように振る舞わない動詞のグループがあることを明らかにしたのである。彼によれば、
1) tum2/tum3 「運ぶ」、2) ku2 「食べる」、3) de2 「注ぐ」、4) inim-gar/ga2-ga2
「不平を言う」、5) a-tu5-tu5 「水浴をする」、6) ku4(r)/ku4-ku4 「入る」その他がその
ような動詞であるという。これらの動詞では、アスペクトの違いに関わらず cross-
reference 要素 -n/-b- は主語を示すのである。

これはすなわち、未完了アスペクトにおいても能格的に振る舞う動詞があることを示し
ている¹⁰⁾。従って、動詞接辞のレベルにおいてアスペクトによるスプリットがあると言っ
ても、それは Michalowski (1980) や Thomsen (1984) の考えていたような単純なもの
ではないのである。

形態的な面におけるスプリットに関しては、アスペクト以外にも様々な要因が報告され
ている。それらには、上で述べた名詞句や動詞句の階層によるものの他、法によるもの、

従属節・主節によるもの等があるが、シュメール語においては未だ十分に検討されているとは言えない¹¹⁾。これらについての検討が、これからの課題となるであろう。

4. 3 統語論的レベル

4. 3. 1 統語論における能格性

さて、統語論で能格性が見られるかどうかについては、これまで全く検討されてこなかった問題であるので、ここでその一部について検討を加えてみよう。

上述したように (2.1)、様々な統語的プロセスに統語的能格性が現れるのであるが、本稿で扱うのは同一名詞句削除に限定することにする¹²⁾。

さて、統語的能格性は具体的には次のように現れる。

Bill hit John and ϕ went away.

英語などの「対格」言語では、この ϕ (=S) は Bill(=A) を指示する (S=A)。ところが、ジルバル語などの統語的能格性を持つ言語では John(=O) を指示するのである (S=O)。そこで、この削除された名詞の指示する名詞を検討すれば、果たして統語的能格性を持っているかどうか確認できるわけである。

さて、この同一名詞句削除に関して、次の二つの観点から検討する必要がある。

等位構文には、S1、S2 の二つの文が存在し、同一名詞句削除は S2 に起こる。そこで、

A) S2 において削除される名詞は S1 における S/A/O のいずれであるか

という観点が考えられる。この S1 における要素をコントローラーと呼ぶ。英語においては次のように現れる。

(1) 等位構文におけるコントローラー (C) (例文は柴谷 (1986 p.78))

a. He_i came and ϕ _i went away. (C=S)

b. He_i hit Bill and ϕ _i went away. (C=A)

c. *Bill hit him_i and ϕ _i went away. (*C=O)

この例では、削除された名詞は S1 の S と A を指示しており、その意味でコントローラーは対格的 (S = A) である。もし能格型の言語なら (1)b が非文となり、(1)c が適格文となるであろう。

二つ目に、

B) 削除された名詞が、S2 の中で S/A/O のいずれの機能を持っているのか

という観点が考えられる。この削除されて出来た空所をギャップと呼ぶ。英語においては次のように現れる。

(2) 等位構文におけるギャップ (G) (例文は柴谷 (1986 p.78))

a. He_j came and ϕ _j went away. (G=S)

b. He_j came and ϕ _j hit Bill. (G=A)

c. *He_j came and Bill hit ϕ _j. (*G=O)

削除された名詞は S2 内においては S か A であり (S=A)、その意味でギャップは対格的である。もし能格的な言語なら (2)b は非文となり (2)c は適格文となるであろう。

英語ではコントローラーもギャップも対格型で起こるが、ジルバル語のように、両方とも能格型の言語も存在する。次の Blake (1979) の例は、ギャップは対格的、コントローラーは能格的と考えられる例である。

(3) Walbiri (Australia)

a. [ngarka-ngku wan.a pantu-nu] [ϕ pank-a-nytya-kura](ϕ =S)
man - ERG snake spear-PAST run-GERUND-COMP

‘The man speared the snake as it was moving quickly.’

b. [ngarka-ngku wan.a pantu-nu] [ϕ kudu yalki-n.inyatya-kura](ϕ =A)
man - ERG snake spear-PAST child bite-GERUND-COMP

‘The man speared the snake as it was biting the child.’

さて、これまでは議論を分かりやすくするために、文の一方を自動詞文としていた。では、S1、S2 ともに他動詞文の場合にはどのような構文が現れるのか考えてみる。

1) C、G ともに対格型

Bill_i hit John and ϕ _i kicked Mike.

2) C は対格型、G は能格型

Bill_i hit John and Mike kicked ϕ _i.

3) C は能格型、G は対格型

Bill hit John_i and ϕ _i kicked Mike.

2) C、G ともに能格型

Bill hit John_i and Mike kicked ϕ _i.

もちろんこれは、動詞が受動形や逆受動形 (antipassive) ¹³⁾ になっていない場合の構文であるから注意しなければならない。

4. 3. 2 シュメール語における分析

4. 3. 2. 1 分析上の問題点

以上述べてきたことを基礎として、シュメール語の統語における能格性の検討を行うに当たって、次の様な問題点が存在する。

1) どれを等位構文と認定するか

接続詞 u3 が文をも接続するので等位構文そのものは存在すると考えられるが、文学テキストにはこの接続詞は用いられないように思われる。従って、本稿で主として用いたグデア碑文には、u3 を用いた等位構文は存在しない。そこで、本稿では「定動詞が同じ行に現れている」場合は等位構文と考えて資料とした。

もう一つの問題点は、

2) シュメール語に受動形は存在するか（または逆受動形が存在するか）である。

これに関しては、この本稿ではないものと仮定して論を進める。もし存在するとすれば、定動詞の接頭辞に現れるはずで、S1 と S2 の接頭辞に留意して分析すればその存在が確認できるはずであるから、問題はないと考えられる。

4. 3. 2. 2 シュメール語の場合

上で見たように、統語の面で能格型の言語の数は非常に少ない。その上、シュメール語の動詞の一致には対格的原理がかなり広範囲にわたって広がっている。従って、シュメール語の統語論は対格的原理で働いていることが予想される。現実の資料もその様に解釈すべきことを示唆しているように思われる。

例えば、

Gudea Cyl. A. XVIII 23)

dusu-ku3 mu-il2 u3-šub-e im-ma-gin

「かご」「聖なる」「掲げる」「煉瓦型」「来る」

「(ニンギシュジダ神が) 聖なるかごを高く掲げて、煉瓦型のところへやってきた。」

もし能格型言語であったら、S2 である u3-šub-e im-ma-gin の主語は、新しい主語としての u3-šub か、または S1 の目的語、すなわち dusu-ku3 のいずれかである。しかしここでは、明らかに^dnin-giš-zi-da が im-ma-gin の主語である。また、もう一つの方法は、S1 の動詞を逆受動形にして mu-il2 の主語^dnin-giš-zi-da を絶対格にすることであるが、接頭辞 mu- が逆受動のマーカであると考えすることは不可能である。この例は、コントローラーが対格型であることを示している。

次にギャップであるが、次の例を見てみよう。

Gudea Cyl. A. XX 13)

gu mu-ba-ra me šu im-du7-du7

「ひも」「解く」「運命」「完全なものとする」

「(グデアは) ひもを解き、運命を完全なものとした。」

コントローラーは対格型だから、ギャップが能格型なら4.3.1で挙げたタイプの2)に属することになる。対格型なら4)のタイプで、これは日本語、英語を同じ型である。もし2)のタイプならS2の主語はmeになり、運命がグデアを完全なものにしたことになる。この解釈は可能だろうか。同様な例として、

Gudea Cyl. A. XVIII 26)

uš mu-gar a2-gar ki im-mi-tag

「基礎」「作る」「壁」「建てる」

「(グデアは) 基礎を築き、(その上に) 壁を建てた。」

が挙げられる。この場合、2) のタイプだとすると、壁がグデアを建てたことになり、明らかにおかしい。従って、ギャップも対格型であると考えるのが妥当である。

このように、同一名詞句削除に関しては、シュメール語は対格的原理で働いているということができると思われる。

次に等位構文でなく、従属構文の場合を見てみよう。

JCS Vol. 22 (1969)

tukum-bi lu2 DAM.TAM!-ni i3-tag4-tag4 1 ma-na ku3 i3-la2-e

「もし」「人が」(=A)「彼の妻を」(=O)「離婚すれば」「1 ミナ」「銀を」「支払う」

「もし人が、妻を離縁すれば、1 ミナの銀を支払う。」

これは、法律文書に見られる文で、最初に「仮定」を表す従属文が来て、さらに主文が続く。この例文を見ると、従属構文においても、コントローラー、ギャップとも能格的でなく対格的に振る舞っていることが分かるであろう。

5 まとめ

これまでの議論をまとめてみよう。

これまでの研究では、格標示のレベルにおいても、動詞接辞のレベルにおいても、スプリットに対する対処が十分とは言えないように思われる。アスペクトによるスプリットの考察は Michalowski (1980) に見られるが、その他の要因によるスプリットには殆ど注意が向けられていない。これからの課題としては、これらを一つ一つ調べていくことが考えられる。

統語論のレベルにおいては、本稿で検討した通り、シュメール語は対格的原理で機能している言語であると思われる。ただ、英語やジルバル語のような、統語的にかかなり強い syntactic pivot を持っているのか、それともそれほど強いものではないのかについての検討は続けていかなければならないだろう。

注

1) Thomsen (1984) 等参照

2) これまでは、Dixon (1979) が殆ど唯一の総合的研究であった。その後、Lingua (1987) 誌や「言語研究」(1986) で能格性に関する特集が組まれるなど、能格性研究のまとめに向けての動きは高まっていた。

3) 上で述べた Dixon (1994) で能格性についての最新の成果が紹介されている。その中でシュメール語も分裂能格言語 (Split-ergative 言語) として挙げられているが、それは Michalowski (1980) と Thomsen (1984) の記述に依っている。

- 4) これは、後述するように、統語論にまで能格性が及んでいる言語が非常に少ないことによると思われる。
- 5) 常に現れるわけではなく、現れたり現れなかったりする。どのような条件のもとで現れるかについての定説は未だない。Yoshikawa (1991) によると、その要素に「焦点」がある場合に現れるという。
- 6) しかし、以上の議論は多くの用例を具体的に検討したというより、むしろ理論に合うよう、思弁的に図式化した感を禁じえない。後述するように、実際このような図式に当てはまらない動詞のグループが存在することが実証されている。
- 7) Silverstein の階層とは、Silverstein (1976) で提案された、名詞句におけるある種の階層で、シルバースティーンによると、動作主へのなりやすさの度合い、動作の対象へのなりやすさの度合いを表すという。階層の高い方は、動作主になりやすく、階層の低い方は対象になりやすいという。そして、動作主になりやすい名詞句は対格型の格をとりやすく、対象になりやすい名詞句は能格型の格をとりやすいと言う。
- 8) 角田の動詞句の階層（二項述語階層）とは、動詞の表す動作が対象に及ぶかどうかの度合いによる階層である。これによると、動作が対象に及ぶ度合いが大きいほど他動詞構文が現れやすくなり、小さいほど与格構文が現れやすくなるという。
- 9) Split-intransitivity に関しては、van Valin, R. D. Jr. (1990) 等参照
- 10) 純粋に理論的な立場に立てば、逆に完了アスペクトにおいても対格的な動詞があってもおかしくはない。これについての検討も必要であろう。
- 11) Yoshikawa (1977) では、希求法における動詞接辞の指示について述べられている。動詞 *sum* では希求法において、完了・未完了に関わらず動詞接辞は対格的に振る舞うという。
- 12) 上で、語形成や名詞化に見られる能格性は普遍的なものであることを見たが、統語面においても同様な現象がある。これには、
- i) 命令形の場合
 - ii) jussive complements の場合
 - iii) 'CAN' や、それに類した動詞の場合
- が含まれるという。このような場合に $S=A$ という取り扱いが見られても、対格的言語であることの証明にはならないと言う。Cf. Dixon (1979 p.112 ff.)
- 13) 受動化とは対格名詞を主格名詞にし、主格名詞を斜格化することで、他動詞構文を自動詞構文に変える文法的操作であるが、逆受動化とはこれと逆に、統語的能格性を持つ言語において、能格名詞を絶対格名詞にし、絶対格名詞を斜格化することで、他動詞構文を自動詞構文に変える文法的操作である。

引用文献

- Blake, B. (1979) Degrees of ergativity. In Plank (ed.) *Ergativity*. 291–306 London
- Diakonoff (1965) *Semito–Hamitic Languages*. Moscow
- Dixon, R. M. W. (1972) *The Dyirbal language of North Queensland*.
_____ (1979) Ergativity. *Language* 55, 59-138
_____ (1994) *Ergativity*. Cambridge Studies in Linguistics 69. Cambridge University Press.
- Foxvog, D. A. (1975) The Sumerian Ergative Construction. *Orientalia* NS 44, 395-425
- 松本克巳 (1986) 「能格性に関する若干の普遍特性」『言語研究』90, 169-190
- Michalowski, P. (1980) Sumerian as an Ergative Language. *Journal of Cuneiform Studies* 32, 86-103
- 柴谷方良 (1986) 「能格性をめぐる諸問題」『言語研究』90, 73-95
- Silverstein, M. (1976) Hierarchy of features and ergativity. In Dixon (1976) *Grammatical Categories in Australian languages*. Canberra
- Thomsen, M. L. (1984) *The Sumerian Language*. Mesopotamia 10. Copenhagen.
- Tsunoda, T. (1985) Remarks on Transitivity. *Journal of Linguistics* 21, 385-396
- 角田太作 (1986) 「能格言語と対格言語におけるトピック性」『言語研究』90, 149-168
- van Valin, R. D. Jr. (1990) Semantic parameters of split intransitivity. *Language* 66/2, 221-260
- Yoshikawa, M. (1977) Some Remarks on the Sumerian Verbal Infixes -n-/-b- in the Preradical Position. *Journal of Cuneiform Studies* 29, 78-96
_____ (1992) Focalization in Sumerian Verbs. *Acta Sumerologica* 13, 389-407
_____ (1992) The Verbs of Agentive-Oriented Infixation. *Acta Sumerologica* 14, 379-394